

ロドリゲス『日本大文典』の成立

— 「ラテン語学」の与えた影響 その2 —

馬場 良二

On the Construction of João Rodriguez's ARTE DA LINGOA DE IAPAM Influenced by the Latin Linguistics No. 2

Baba, Ryôji

- 0 はじめに
- 1 マヌエル・アルバレス『ラテン文典』
- 2 土井氏の指摘
 - 2-1 全体の構成
 - 2-2 名詞の格
 - 2-3 **Verbo substantiuo**
 - 2-4 **Modo optatiuo**
 - 2-5 名詞の複数
 - 2-6 動詞連用形の用法
 - 2-7 **Modo infinito**
 - 2-8 用例とその出典
 - 2-9 **Modo potencial**
- 3 『ラテン文典』と『日本大文典』章立ての比較
 - 3-1 両文典間に対応関係がはっきりしている章について
 - 3-2 両文典間に対応する章のない場合について
- 4 おわりに
 - 『ラテン文典』『日本大文典』章立て対照表-1~3
 - 参考文献

第0節、第1節、第2節は平成5年度『学術紀要』に掲載。

【キー・ワード】 ロドリゲス『日本大文典』、アルバレス『ラテン文典』、ラテン文法

3. 『ラテン文典』と『日本大文典』の章立ての比較

第2節では、土井氏の指摘に従って文献学的に両文典を比較検討し、その類似点を原本に戻って列挙した。ここでは、両文典の章の題目とその内容を比べることによって、『日本大文典』のよって立つところの文法体系が『ラテン文典』、つまりは、当時のヨーロッパのラテン語学の文法体系に根ざしていたことを示す。『日本大文典』は『ラテン文典』を参考にし、そこからいくつかの記述を資料として引いてきた、だけではなく、その文典の成立自体が、『ラテン文典』の成立と基盤を一にしていたのである。

この論文の最後に挙げた『ラテン文典』『日本大文典』章立て対照表は『ラテン文典』の章立てを左に、『日本大文典』の章立てを右に並べ、対照したものである。それぞれの章立て一覧の最左欄に葉数(①、②、③…は葉に数字のふっていない部分、‘v’は「裏」を示す。『日本大文典』の方には葉の表裏の記述はない)、その右の欄に原文の、さらにその右に日本語訳の章の名がある。『ラテン文典』の章題の日本語訳は筆者によるもので、『日本大文典』の方は土井氏の訳書から引いたものである。両文典でその記述内容が対応すると思われる章は左右に揃え、で囲った。2-1で「(『ラテン文典』の影響は)第一巻に於いて最も密であり、第二巻第三巻と後に進むに従って次第に疎になってゐる。」という土井氏の記述を引用した。その様子は、これら三つの表のを見れば明らかである。

この「表」は1、2、3に分かれている。それぞれは『ラテン文典』の第1巻、第2巻、第3巻に相当している。しかし、この表の2、3は『日本大文典』の第2巻、第3巻にぴったりとは対応していない。なぜなら、両文典の発音、韻律関係の記述は、『ラテン文典』では第3巻の巻末に、『日本大文典』では第2巻の巻末にあるからで、「表」は『ラテン文典』の巻に対応させてあるので、『日本大文典』の発音、韻律関係の記述部分、つまり、第2巻の巻末は「表-3」に来ている。『日本大文典』の第3巻の章で『ラテン文典』の第3巻の章と対応するものは、「206 日本の名字について」だけである。

西洋文化の伝統の中に生まれたロドリゲスにとって、『文典』とは3部に分かれているものであった。日本での「言語生活」あるいは「布教活動」「生活」に必要なことがらまでも記述することが不可欠だと判断し、それを含めて3巻にまとめた。その時、彼は「言語」に関する記述を第2巻までで終えてしまい、手紙の書き方や日時、年号の数え方、方位についての記述は第3

巻に入れたのである。この原則に従えば、『ラテン文典』の第3巻に位置する「164 「姓」について」に対応する「206 日本の名字について」は第2巻に入るべきものであるが、『日本大文典』においても『ラテン文典』同様第3巻にわりふられている。名字についての記述は語学よりも、その運用や言語生活的、文化的記述の間に位置づけるべきだと考えたからであろう。

以下、『ラテン文典』の葉数は、L-1、2、3…、LはLatinのL、『日本大文典』の葉数はG-1、2、3…、GはARTE GRANDE（『大文典』）のGで示す。

3-1 両文典間で対応関係がはっきりしている章について

ここでは、両文典間で対応関係がはっきりしている章題、つまり、対照表で で囲まれている章題について、述べていく。

3-1-1 L-3v, 8v / G-1

L-3v DE NOMINVM DECLINATIONE. 名詞変化について

8v DE PRONOMINVM DECLINATIONE. 代名詞の変化について

G-1 Da declinaçam dos nomes & pronomes. 名詞と代名詞の転尾について

L-3v, 8vは『ラテン文典』の第3葉裏と第8葉裏を示し、G-1は『日本大文典』の第1葉を示す。

ロドリゲスはG-67~67vで日本語の代名詞のために独立した章を設けているが、G-1では代名詞と名詞とを区別することはしていない。形態論的にラテン語の代名詞はそれだけでひとつの範疇を成すが、日本語ではそうではなく、代名詞の *declinaçam*（語形変化）は名詞と同じだからである。

3-1-2 L-12v / G-3、7

L-12v DE VERBORVM CONIVGATIONE. 動詞活用について

G-3 Da conjugaçam do verbo substantiuo. 存在動詞の活用について

7 Da conjugaçam dos verbos affirma- 肯定動詞並に否定動詞の活用について
tios, & negatios.

L-12v~51で取り上げられている動詞は、コピュラ動詞の *sum*、第1活用動詞の *amo*（愛する）、第2活用動詞の *deceo*（言う）、第3活用動詞

の *lego* (読む)、第4活用動詞の *avdio* (聞く) の五つである。コンピュータ動詞である *sum* は当時の文法でも他の動詞とは区別されており、*verbo substantiuo* と呼ばれていた。G-3の章題に見られるのがそれである。第1活用動詞から第4活用動詞というのは、いわゆる、規則動詞であり、その活用に関する記述というのはG-7に対応する。ただし、G-7にある *verbos negatiuos* 「否定動詞」に対応する記述はL-12vには見られない。それは、ラテン語における否定が *non*、*nenque*、*nec* などの否定辞を文中に加えることによって表され、動詞の屈折には関与しないからである。日本語の動詞はラテン語とはことなり、動詞自体が語形変化を起こして否定辞を従える。ロドリゲスはその特性に着目し、*aguenu* (上げぬ)、*aguezu* (上げず)、*aguezaru* (上げざる) などそれぞれ全体をひとつの動詞と考え、これを否定動詞と呼んだ。ラテン文法の枠組みにあてはめるだけでなく、日本語の語学的体系の記述に独自の考え方を導入した一例といえる。

3-1-3 L-58、62v、67v、68v / G-45

L-58 DE VERB. DEFEC. CONIVGATIONE. 欠如動詞の活用について

62v DE VERBIS ANOMALIS. 変則動詞について

67v DE VERBIS DEFECTIVIS. 欠如動詞について

68v DE VERBIS IMPERSONALIBVS. 非人称動詞について

G-45 Dos verbos defectiuos, Anomalos, &c. 不完全動詞、変格動詞などについて

G-102 Do verbo impessoal. 非人称動詞について

研究社『新言語学辞典』には、*defective verb* 「欠如動詞：一般の動詞が持っている活用形の一部を具備していない動詞 (*shall*, *will*, *can*, *may*, *must*; *ought*) および変則動詞 (*ANOMALOUS VERB*) としての *dare*, *need* をいう」、*anomalous verb* 「変則動詞：不規則な活用」をする動詞で、「ギリシア語で区別されている *-ō verb* と *-mi verb* の名残である」、*impersonal verb* 「非人称動詞：天候・時間・距離その他の表現において、意味上特定の論理的主語を持たず、定動詞としては常に三人称単数である動詞をいう」とある。いずれにしる活用が不規則な動詞のことである。

「欠如動詞」はL-58とL-67vとにくり返し出てくる。これは、前者の「欠如動詞」が以下のL-62v、67v、68vの三つの章の「変則動詞」「欠如動詞」「非人称動詞」のすべてをまとめた動詞の一分類であることを表して

いるからであろう。G-45の章の「&c.」は *verbos defectiuos*, *Anomalos* 以外の、活用の不規則な動詞のことで、この章も活用が不規則な動詞全般を扱っている。また、これとは別にG-102の章では非人称動詞を独立に取り上げている。

3-1-4 L-70、78v、82、89

G-55、58、61、64、67、69、73、77、79

- L-70 *RVDIMENTA*. 基本
 78v *DE GENERIBVS NOMINVM*. 名詞の種類について
 82 *DE NOMINVM DECLINATIONE*. 名詞変化について
 89 *DE VERBORVM PAÆT. ET SVPINIS*. 動詞の過去と *SUPINUM* について
- G-55 *Rudimenta, onde breuemente se trata das partes da oraçam, & se apontam varios preceitos acerca da lingoa Iapoa.* 品詞論、ここでは品詞の分類を簡単に取扱い、日本語に関するいろいろな規則を指摘する
- 58 *Das partes da oraçam Iapoa, & das vozes chamadas Coye, & Yomi.* 日本の品詞及び‘こゑ’と‘よみ’のよみ方について
- 61 *De como se deuem chamar verbos os que ategora corriam por nomes adiectiuos.* 今日まで形容名詞として通用したものを何故に動詞と呼ぶべきかといふことについて
- 64 *De varios generos de adiectiuos.* 形容詞のいろいろな種類について
- 67 *De varios graos de pronomes primitiuos.* 単純代名詞のいろいろな階級について
- 69 *De varios generos, & graos de verbos.* 動詞のいろいろな種類と階級について
- 73 *Da Posposiçam, Aduerbio, Cõjunçam, &c.* 後置詞、副詞、接続詞などについて
- 77 *Da particula, Artigo, numero, &c.* 助辞、格辞、数などについて
- 79 *Dos casos, genero, tempos, modos, pressoas, &c.* 格、性、時、法、人称などについて

RVDIMENTA というのは、初歩的基礎的知識や入門といったことを示す。文法書で言えば、「基礎編」、「入門編」といったところであろう。そして、『ラテン文典』では、名詞、代名詞、動詞、分詞、前置詞、副詞、感動詞、接続詞の8品詞の形態論を扱っている。『日本大文典』の Rudimenta では、実質名詞、形容名詞、代名詞、動詞、分詞、後置詞、副詞、感動詞、接続詞、助辞、格辞などの品詞の形態論を扱っている。そして、それ以外に、ラテン文法に対応するものを見出すことのできない、日本語特有の言語現象と考えられる‘こゑ’と‘よみ’の別について、また、元来西欧語的文法範疇、概念である、日本語には見出し得ないはずの、格、性、時、法、人称などが、日本語の中でいかに実現されているかについて、述べられている。

両言語の形態論的な基本事項が記述されているという点でこれらの章は対応している。

3-1-5 L-93/G-83

L-93 DE CONSTRVCTIONE INTRANSITIVA. 自動詞文の作り方について
G-83 Da construiçam intransitiua, & collo- 同格構成、及び主格と動詞
caçam do Nominatiuo & verbo, &c. などとの語順について

CONSTRVCTIONE/construiçam というのは、英語でつづるなら construction であり、「(文・語句の)構造、組立；構文」(研究社『新英和大辞典』)ということを表す。INTRANSITIVA/intransitiua は、英語でつづるなら intransitive であり、意味は「自動詞の」である。L-93も G-83も intransitive construction であり、どちらも、自動詞文の統語論を扱っている。

3-1-6 L-96v, 102/G-93

L-96v DE CONSTR. TRANSIT. NOMINIS. 名詞を含む他動詞文の作り方について
102 DE CONSTR. TRANSIT. VERBI. 他動詞文の作り方について
G-93 Da construiçam transitiua do nome. 名詞の異格構成について

両文典どちらも、これらの章では他動詞文について扱っている。

- 3-1-7 L-106、110v / G-96、99
 L-106 DE CONSTRUCTIONE VERBI ACTIVI. 能動動詞文の作り方について
 110v DE CONSTRUCTIONE VERBI PASSIVI. 受動動詞文の作り方について
 G-96 Da construiçam transitiua do verbo 能動動詞などの異格構成に
 actiuo, &c. について
 99 Do verbo passiuo. 受動動詞について

両文典ともに、これらの章では能動文、受動文を取り上げている。

- 3-1-8 L-112 / G-106
 L-112 DE CONSTR. COMMVNI OMNIVM すべての動詞に共通する文
 VERBORVM. の作り方について
 G-106 Da construiçam cõmum a todos os 動詞のすべてに通ずる構成
 verbos. について

L-112の DE CONSTR. COMMVNI OMNIVM VERBORVM. をそのままポルトガル語に訳したのがG-106の Da construiçam cõmum a todos os verbos. である。

- 3-1-9 L-116、117v、119v / G-103、104
 L-116 DE CONSTRUCTIONE VERBI IN- 不定法の動詞を含む文の作
 FINITI. り方について
 117v DE CONSTRUCTIONE GERVND. gerundio と supinum を含
 ET SVPIN. む文の作り方について
 119v DE CONSTRUCTIONE PARTI- 分詞を含む文の作り方につ
 CIPIORVM. いて
 G-103 Do verbo infinito. 不定法動詞について
 104 Dos Gerundios, Supinos, Partici- 動詞性名詞、目的分詞、分
 pios, &c. 詞などについて

「不定法」「gerundio」「supinum」「分詞」というのは、動詞を文中で他の品詞として使用する場合の、形態論や統語法のことである。G-103、104では、ポルトガル語における infinito 「不定法」、gerundio、supino、participio 「分詞」に対応する日本語の動詞の用法が論じられている。

- 3-1-10 L-122v / G-140
 L-122v DE CONSTRVCTIONE PRÆPOSI- 前置詞を含む文の作り方につ
 TIONVM. いて
 G-140 Da Posposiçam. 後置詞について

L-122vのPRÆPOSITIONVMは英語でいう *preposition* 「前置詞」のこと、それに対し、G-140の *Posposiçam* は日本語に訳すと「後置詞」ということになる。ラテン語、英語の前置詞に相当する言語要素は、日本語では語の後ろに置かれる。よって、上記ふたつの章題は対応関係にあると言える。

- 3-1-11 L-125v, 129v, 130 / G-112, 125, 130
 L-125v DE CONSTRVCTIONE ADVERBII. 副詞を含む文の作り方につ
 いて
 129v DE CONSTRVCTIONE INTERIEC- 間投詞を含む文の作り方につ
 TIONIS. いて
 130 DE CONSTRVCTIONE CONIVNC- 接続詞を含む文の作り方につ
 TIONIS. いて
 G-112 Do Aduerbio. 副詞について
 125 Da Interjeiçam. 感動詞について
 130 Da Conjunçam. 接続詞について

両文典ともに、副詞、感動詞、接続詞にそれぞれ独立した章をあてている。

- 3-1-12 L-132v / G-168
 L-132v DE FIGVRATA CONSTRVCTIONE. 比喩表現の用い方について
 G-168 Da construiçam figurada. 修辞の構成について

G-168の章題はL-132vのラテン語をそのままポルトガル語に訳したものであり、対応がはっきりしている。

- 3 - 1 - 13 L - 137v / G - 173
 L - 158v / G - 180
 L - 164 / G - 206
 L - 170, 170v / G - 179
- L - 137v DE SYLLABARVM DIMENSIONE. 音節の「量」について
 G - 173 Dos accentos da lingua Iapoa. 日本語のアクセントについて
- L - 158v DE VARIIS GENER. CARMINVM. 詩歌のいろいろな種類について
 G - 180 Da Poesia de Iapam. 日本の和歌について
- L - 164 DE PATRONYMICIS. 「姓」について
 G - 206 Dos nomes gentlicos de Iapam. 日本の名字について
- L - 170 DE GRÆCIS VERBIS. ギリシャ語からの語句について
 170v DE VOCIBVS HEBRACIS. ヘブライ語からの語句について
- G - 179 Do modo de introduzir alguns vocabulos nossos na lingua Iapoa. われわれの或語を日本語の中に取入れる方法について

『ラテン文典』の第3巻は古典ラテン語の音声、韻律について、語について、「姓」について、そして、語句の移入についてで構成されている。このうちの「姓」についてだけは、『日本大文典』では第3巻で扱われており、あとは、第2巻の第173葉から184葉で扱われている。つまり、大雑把には『ラテン文典』の第3巻はそれ全体が、『日本大文典』の第2巻の第173葉以降、と、第3巻の第206~212葉に対応していると言える。

ポルトガル語はストレスアクセントの言語であり、G - 173の *accentos* が日本語のピッチアクセントを指しているとは考えにくい。一方、L - 137v DE SYLLABARVM DIMENSIONE. では、母音・子音の挿入、欠落、音節の長短、二重母音などが扱われている。これらの章はともに発音上の最小単位の変異について述べているものと考えられる。

L - 164の PATRONYMICIS というのは、父の名を採った名、父祖の名から出た名、あるいは、「姓」「名字」一般、を意味し、G - 206の *nomes*

gentilicos というのは、異教徒の名前、を意味する。ロドリゲスの言う *gentilicos* 「異教徒」というのは、キリスト教に改宗していない日本人全般のことである。これら二つの章題によれば、どちらの章も各言語を話す文化における「名前」について記述していることになる。

L-170、170v はギリシア語、ヘブライ語の語句がポルトガル語に移入された場合、発音上どのような語形変化が生じるかということを述べた章で、それはちょうど、G-179で述べている事例、つまり、ポルトガル語の語句を日本語に移入する場合のように語形を変化させるかに対応する。「われわれの或語」が「日本語の中に取り入れ」られた場合でなく、「取り入れる方法について」述べているのは、カトリックの用語は訳さず、基本的にポルトガル語のまま日本語にまぜて使うようにしていたからである。

3-2 両文典間で対応する章題のない場合について

ロドリゲスはラテン語学の体系をもとに、それにあてはめる形で日本語を記述した。日本語の体系の中に対応するものをなんとか見つけ出すように心がけていたようだが、対応する事項の見つからなかったこともある。それは、両言語の言語構造の違いによる場合と、ラテン語はヨーロッパでの正式な書きことば、日本語は海外での布教活動のための言語、といった、使用目的、学習目的の違いによるものであった。

3-2-1 『ラテン文典』にはあって『日本大文典』にはない章について 言語構造の違いによるもの

『ラテン文典』第52葉の章題に見られる **VERB. DEPON.** を英語にすると **deponent verb** であり、『新英語学辞典』には「ギリシア語・ラテン語文法の用語。形態上、受動態もしくは中間態でありながら、意味は能動態の自動詞・他動詞と変わらない動詞をいう」とある。ロドリゲスは、古典ラテン語にある文法範疇はなんとかそれに対応するものを日本語に見い出そうとしたようだが、**deponent verb** という、動詞の下位分類を日本語にあてはめることはできなかったのであろう、「L-52v **DE VERB. DEPON. CONIVGATIONE.** (形式所相動詞の活用について)」に対応する章題、記述は『日本大文典』にはみられない。

言語学習の目的の違いによるもの

カトリックの世界での公用語、正式な言語としてのラテン語には、文法の

習得はもちろん音楽的韻律に習熟することも不可欠であった。よって、第150葉の *DE VLTIMIS SYLLABIS*（最終音節について）以下、*DE SYLLABA COMMVNI*（音節全般について）、*DE PEDIBVS*（「脚（詩の韻律単位）」について）、*DE CARMINVM DIMENSIONE*（詩歌の（韻律的）「量」について）、*DE CÆSVRA*（（韻律的）休止について）、*DE FIGVRIS POET*（韻文における比喻について）、*DE PROSODIA*（韻律について）といった音や韻律に関する章が多くある。一方、彼らにとっての日本語は民衆に説教すること、懺悔を聞くこと、仏教徒たちと論争すること、そして、権力者から布教活動の援助ないしは許可を得ることであり、日本語の音楽的美しさを身につける必要はあまりなかった。ただし、ロドリゲスは常にヨーロッパの言語の影響の少ない日本語らしい日本語の発音をめざしており、その意味で『日本大文典』第178葉には *Dos modos de pronunciar a lingoa Iapoa*（日本語の発音法）の章が設けられている。

3-2-3 『日本大文典』にはあって『ラテン文典』にはない章について

『日本大文典』の冒頭 *ALGŪAS ADVERTÊNCI-as pera mayor intelligencia do que nesta Arte se trata*（本文典の論述を理解し易からしめんが爲の例言数則）に、日本語は *he muy copiosa, & elegante*（甚だ豊富であり典雅である）とある。その理由として、同義語の多さとその表すニュアンスの豊かさ、複合語と副詞の多様さ、以上を挙げ、そして、日本語の特質として、誰がいる場所で、誰に対して、誰または何について話すかによって著しく言い方の変わる待遇表現を挙げている。具体的には以下の通りである。

assi pollos muytos vocabulos que tem pera significar hũa mesma cousa（同一の事柄を言ひ表す為の語が多数あって）、*hũs mais propios que outros*（あるものは他のものよりも適当である）、*como pollas varias composições com breuidade, & energia exprimẽ*（その複合語を使って簡潔にしかも力強く言ひ表す）*cousas, & acções q̃ em nossas lingoas não se podem bem exprimir, ou não sem rodeos*（我々の国語ではうまく言ひ表せないか廻りくどい言ひ方をしなければならぬかする事柄や動作を）、*& assi mesmo pollos muytos aduerbios q̃ com grãde propriedade significão particulares circunstâncias das*

cousas, & das acções (副詞が多数あって、事物や動作の特殊な状況を極めて適切に示す) : de sorte que em gram parte o ã nos significamos com gestos, & mouimêtos de mãos (我々が身振りや手真似で示すものを), significação os Iapões cõ suas composições, & aduerbios (日本人は多く複合語と副詞とで示す) : he na maneira de respeitos, & cortesias que inclue nos modos de falar quasi vniuersalmente (殆どあらゆる場合の言ひ方に含まれてゐる尊敬及び丁寧の仕方に於いて豊富であり典雅である) : por que tem verbos acõmodados pera falar de pessoas, & com pessoas baixas, & altas (話し相手なり話題に上る人なりの身分の高下に相応したそれぞれの動詞があり), & tẽ varias particulas que se ajuntão aos verbos, & nomes (動詞や名詞に接続する色々な助辞がある), respeitando sempre à pessoa cõ quẽ, de quẽ, & de ã cousas fala, pera vsar das taes particulas, & verbos conforme a calidade de cada hũ (さういふ助辞や動詞の一語一語をその性格に応じて使はうとすれば、誰と話し、誰の事を話し、どういふ物に就いて話すかといふ事を常に考慮しなければならない) ; de modo que se não pode aprender sem juntamente se aprender a falar com honra, & cortesia (尊敬と丁寧の加はった言ひ方と共に学ぶのでなければ、学び得るものではない).

言語構造の違いによるもの

『日本大文典』にはあって『ラテン文典』にはない、ということは、日本語にあってラテン語にない。彼らにとって特筆すべき事項だということである。

ロドリゲスは日本語における漢語の存在の大きさを見抜いており、漢語系のことばを「こゑ」、和語系のことばを「よみ」として分けて考えていた。彼のいう「同義語」には、同一の意味内容を表す語に「こゑ」と「よみ」との対応も含まれていた。この対応全般を扱っているのが、第188葉の「**Alguns preceitos pera o vso de Coye, & lingoa da escritura** (‘こゑ’の用法に関する規則と文書の用語の規則若干)」であり、数多くある否定の接辞を「こゑ」と「よみ」に分けて論じたのが第154葉の「**Das particulas negatiuas** (否定の助辞について)」である。

ロドリゲスの言う「副詞」は、現代の学校文法の「副詞」とは大いに異なる

り、用言の連用形、動詞のテ形の一部、現代日本文法でいうところの後置詞、「さへ、すら、だに」などの副助詞、形式名詞の「ところ、よう（様）」など、接尾辞、接頭辞、助動詞、といったようになりにかなり雑多なものを示している（馬場良二「ロドリゲス『日本文典』における「エレガント」について」、『熊本女子大学学術紀要』1992、Vol. 44、p. 32参照）。

西欧語の否定文では文の中に否定辞を入れるのであって、動詞に否定を表す要素が接続するという事はない。ロドリゲスは西欧語と日本語とのこの差異に着目し、日本語の動詞に肯定動詞と否定動詞とを認めた。また、彼は日本語の用語の連用形に数多くの用法があり多様な機能と意味を持つことを認め、動詞の連用形を動詞の「語根」と呼んで、その用法をくわしく記述している。それが第84葉の「*Do vso da rayz affirmatiua, & negatiua dos verbos*（動詞の肯定語根、否定語根の用法について）」である。また、現代日本文法における接尾辞、接頭辞、助動詞といったものは彼の品詞分類では *atrigo*（格辞）や *particula*（助辞）であり、これらについては第137葉、第149葉の章で扱われている。

話し相手に対する尊卑の態度を示す表現は何語にもあるが、日本語の待遇表現は、ラテン語とくらべると、はるかに体系的、文法的である。単なる言い回しや慣用句ではなく、語彙論的、統語論的に体系的であるこの表現はG-158 *Das particulas de honra*（尊敬の助辞について）、G-164 *Dos verbos honrados de sua natureza*（本来の尊敬動詞について）、G-165 *Dos verbos humildes*（謙譲動詞について）、に記述されている。

言語の構造上の違いではなく、その使われ方の違いによることではあるが、古典ラテン語は、キケロ、ウェルギリウス等の言語作品の中のラテン語であり、ロドリゲスの時代には「死語」であった。その発話は各言語の話者の発話にまかされ、一方、文法は固定されていた。「死語」であるがために発音の変異は無視され、一方、文法には変異が存在しなかったことになる。よって、『ラテン文典』にはラテン語の空間的変異についての記述は見られない。が、日本語を学習する際にこの変異を無視することはできず、G-169の章「*Dos abusos no falar proprios dalguns reynos*（ある国々特有の言ひ方における誤謬について）」が加えられた。

言語学習の目的の違いによるもの

3-2-2で述べたように、イエズス会の宣教師たちにとって、時の権力者に出す書状というものは非常に重要な意味を持っていた。文書による誓約

の書き方、G-202 *Do Xeixi de Iapam. i. jurmêto por escrito* (日本のXeixi (誓紙)、即ち書き物による誓約について)、願い事をする場合の手紙の書き方、G-204 *Do voto por escrito* (書き物による願書について)、また、訴える場合、G-204 *De como se escreue apetiçam, ou accusaçam* (訴訟を如何に書くかといふ事について)。これらの書状によって彼らの活動が大きく左右されたであろうことは想像に難くない。そのため、『ラテン文典』には現れない記述が『日本大文典』にはあり、また、手紙文に使われた「候」についての章、G-52 *Da conjugaçam do verbo Soro* (動詞Soro (候)の活用について)や、書きことばや手紙についての章G-38 *Da conjugaçam dos verbos da escritura* (書きことばの動詞の活用について)、G-184 *Do estilo da escritura* (文書の文体について)、G-189 *Tratado do estilo das cartas* (書状の文体の論)が加えられている。

文化的な事柄

文化、習慣の異なる地でそれまで知られていなかった宗教を広めるのは大変難しいことである。しかも、ことを行うには理屈や筋道だけでなく、常日頃の間人間関係も不可欠となっている。そこで、その人間関係を作り、維持するための「あいさつ」に伴う「贈答」、それに必要となる「目録」を説明する章が第205葉の「*Do Mocurocu (Mocurocu (目録)について)*」である。太陽暦と西暦を用いる人々に対する便宜として第229葉の

G-229 *Tratado do modo de contar os tempos, annos, meses, dias, horas,* 号などの数へ方の論
eras, &c.

が、十二支のない社会に対するものとして第231葉の

G-231 *Dos animais que respondem as horas de Iapam, & dos rumos da agulha.* 日本の時刻に該当する動物について、又羅針の方位について

が加えられている。第212葉の「*Tratado de varios modos de cõtar* (いろいろな数へ方の論)」は助数詞についてであり、言語的な違いともとらえられるが、ロドリゲスは文化、習慣的な事柄を多く述べている第3巻に入れている。

4. おわりに

この論文末の表の『ラテン文典』の章立ては、天理図書館善本叢書の **DE INSTITUTIONE GRAMMATICA** のページすべてを検索して作成したものであるが、『日本大文典』の章立ては、原本の **TABOADA DO QVE SE CON-tem nestes tres livros da Arte Iapoa**（この日本文典三巻に含まれる事項の目次）からそのまま抜いてきたものである。ロドリゲスの作成したこの目次は「目安」として作られたものらしく「もれ」がある。そのひとつが、代名詞の章である。

ラテン語学においてはギリシア語文法の名詞、代名詞、動詞、分詞、前置詞、副詞、間投詞、接続詞の八つの品詞分けを受けて、「代名詞」という文法範疇が確立していた。アルバレスの『ラテン文典』では第120葉裏から **DE CONSTRUCTIONE PRONOMINVM**（代名詞を含む文の作り方について）という章が始まっている。ロドリゲスの作成した目次の第67葉には「**De varios graos de pronomes primitiuos**（単純代名詞のいろいろな階級について）」という章題が見られる。実はこれは章ではなく、第1巻 **RVDIMENTA**（日本語品詞論）の中の第67葉表にこの章題があり、その記述は第68葉表までの3ページにわたっている「**DO PRONOME**（代名詞に就いて）」という章の一部である。『日本大文典』に対しても『ラテン文典』に対してと同様、その章立てを検索すべきであった。

『日本大文典』には『ラテン文典』から引用したと思われる例文があり、説明文その他の記述にも共通部分が見られる。それだけでなく、全体の構成、章立ても『ラテン文典』と重なるところが多い。両文典の章立てを比較、検討したものの、『日本大文典』の章立ての検索、確認を行わなかったこと、また、各章の記述内容に対する踏み込みが甘いこと、ラテン語に対する知識が不十分なことと、不足な点は多々あった。が、『日本大文典』が『ラテン文典』に似ている理由が、ロドリゲスが著述の資料として『ラテン文典』を参考にしたからというだけでなく、彼の言語観自体が当時のラテン語学に基づいたものであったからだ、ということが明らかになれば幸いである。

『ラテン文典』

LIBER I

第1巻

① PRÆFATIO.	序文
③ Auctoris carmen ad librum.	この書に寄せた著者の8行詩
③ IDEM AD CHRISTIANVM PRÆ- CEPTOREM.	キリスト教者としての教師へ宛てた 7行詩
③ AVCTOR LECTORI.	読者への序
④ AD MONITIO.	注意書き
3v DE NOMINVM DECLINATIONE.	名詞変化について
8v DE PRONOMINVM DECLINATIONE.	代名詞の変化について
12v DE VERBORVM CONIVGATIONE.	動詞活用について
52v DE VERB. DEPON. CONIVGA- TIONE.	形式所相動詞の活用について
55 DE VERB. COM. CONIVGATIONE.	一般動詞の活用について
58 DE VERB. DEFEC. CONIVGA- TIONE.	欠如動詞の活用について
62v DE VERBIS ANOMALIS.	変則動詞について
67v DE VERBIS DEFECTIVIS.	欠如動詞について
68v DE VERBIS IMPERSONALIBVS.	非人称動詞について
70 RVDIMENTA.	基本
78v DE GENERIBVS NOMINVM.	名詞の種類について
82 DE NOMINVM DECLINATIONE.	名詞変化について
89 DE VERBORVM PRÆT. ET SVPINIS.	動詞の過去とSUPINUMについて

『日本大文典』

LIVRO I

第1巻

- | | |
|---|-----------------------------|
| ① LICENÇA. | 允許状 |
| ② APROVAÇAM. | 認可状 |
| ③ PROEMIO. | 緒言 |
| ⑤ ALGVA SADVERTENCI-as pera mayor
intelligencia do que nesta Arte se
trata. | 本文典の論述を理解し易からしめんが為の例
言数則 |

1 Da declinaçam dos nomes & pronomes.	名詞と代名詞の転尾について
--	---------------

3 Da conjugaçam do verbo substantiuo.	存在動詞の活用について
7 Da conjugaçam dos verbos affirmatiuos, & negatiuos.	肯定動詞並に否定動詞の活用について

38 Da conjugaçam dos verbos da escritura	書きことばの動詞の活用について
---	-----------------

45 Dos verbos defectiuos, Anomalos, &c.	不完全動詞、変格動詞などについて
---	------------------

47 Da conjugaçam dos verbos acabados em Ai, ei, ij, oi, ui.	Ai, ei, ij, oi, ui (アイ、エイ、イイ、オイ、 ウイ) に終る動詞の活用について
52 Da conjugaçam do verbo Soro.	動詞 Soro (候) の活用について

55 Rudimenta, onde breuemente se trata das partes da oraçam, & se apontam varios preceitos acerca da lingua Iapoa.	品詞論、ここでは品詞の分類を簡単に取扱ひ、 日本語に関するいろいろな規則を指摘する
---	--

58 Das partes da oraçam Iapoa, & das vozes chamadas Coye, & Yomi.	日本の品詞及び‘こゑ’と‘よみ’のよみ方 について
--	------------------------------

61 De como se deuem chamar verbos os que ategora corriam por nomes adjectiuos.	今日まで形容名詞として通用したものを何故 に動詞と呼ぶべきかといふことについて
--	--

64 De varios generos de adjectiuos.	形容詞のいろいろな種類について
67 De varios graos de pronomes primitiuos.	単純代名詞のいろいろな階級について

69 De varios generos, & graos de verbos.	動詞のいろいろな種類と階級について
73 Da Posposiçam, Aduerbio, Cõjunçam, &c .	後置詞、副詞、接続詞などについて

77 Da particula, Artigo, numero, &c.	助辞、格辞、数などについて
--------------------------------------	---------------

79 Dos casos, genero, tempos, modos, pessoas, &c.	格、性、時、法、人称などについて
--	------------------

『ラテン文典』

LIBER II

第2巻

93 DE CONSTRVCTIONE INTRANSITIVA.	自動詞文の作り方について
96v DE CONSTR. TRANSIT. NOMINIS.	名詞を含む他動詞文の作り方について
102 DE CONSTR. TRANSIT. VERBI.	他動詞文の作り方について
106 DE CONSTRVCTIONE VERBI ACTIVI.	能動動詞文の作り方について
110v DE CONSTRVCTIONE VERBI PASSIVI.	受動動詞文の作り方について
112 DE CONSTR. COMMVNI OMNIVM VERBORVM.	すべての動詞に共通する文の作り方について
116 DE CONSTRVCTIONE VERBI INFINITI.	不定法の動詞を含む文の作り方について
117v DE CONSTRVCTIONE GERVND. ET SVPIN.	gerundio と supinum を含む文の作り方について
119v DE CONSTRVCTIONE PARTICIPIORVM.	分詞を含む文の作り方について
120v DE CONSTRVCTIONE PRONOMINVM.	代名詞を含む文の作り方について
122v DE CONSTRVCTIONE PRÆPOSITIONVM.	前置詞を含む文の作り方について
125v DE CONSTRVCTIONE ADVERBIL.	副詞を含む文の作り方について
129v DE CONSTRVCTIONE INTERIECTIONIS.	感動詞を含む文の作り方について
130 DE CONSTRVCTIONE CONIVNCTIONIS.	接続詞を含む文の作り方について
132v DE FIGVRATA CONSTRVCTIONE.	比喩表現の用い方について

『日本大文典』

第2巻

LIVRO II

83 Da construiçam intransitiua, & collocaçam do Nominatiuo & verbo, &c.	同格構成、及び主格と動詞などの語順について
84 Do vso da rayz affirmatiua, & negatiua dos verbos.	動詞の肯定語根、否定語根の用法について
86 Do Nominatiuo com o verbo.	動詞を伴ふ主格について
87 Do modo de explicar o Relatiuo.	関係句の言ひ表し方について
89 De varios nomes interrogatiuos.	いろいろな疑問名詞について
90 Da construiçam dos verbos adiectiuos.	形容動詞の構成について
93 Da construiçam transitiua do nome.	名詞の異格構成について
94 Do nome Partitiuo, comparatiuo, & superlatiuo, &c.	部分名詞、比較級名詞、最上級名詞などについて
95 Dos pronomes deriuatiuos.	派生代名詞について
96 Da construiçam transitiua do verbo actiuo, &c.	能動動詞などの異格構成について
99 Do verbo passiuo.	受動動詞について
100 Do verbo neutro.	中性動詞について
102 Do verbo impessoal.	非人称動詞について
103 Do verbo infinito.	不定法動詞について
104 Dos Gerundios, Supinos, Participios, &c.	動詞性名詞、目的分詞、分詞などについて
106 Da construiçam cõmum a todos os verbos.	動詞のすべてに通ずる構成について
108 Das questoens dos lugares, Vbi, vnde, quã, quò.	場所に関する問ひ、どこに、どこから、どこを、どこへについて
112 Do Aduerbio.	副詞について
125 Da Interjeiçam.	感動詞について
130 Da Conjunçam.	接続詞について
137 Do Artigo.	格辞について
140 Da Posposiçam.	後置詞について
149 Da Particula.	助辞について
154 Das particulas negatiuas.	否定の助辞について
158 Das particulas de honra.	尊敬の助辞について
164 Dos verbos honrados de sua natureza.	本来の尊敬動詞について
165 Dos verbos humildes.	謙讓動詞について
168 Da construiçam figurada.	修辭の構成について
169 Dos abusos no falar proprios dalguns reynos.	ある国々特有の言ひ方における誤謬について

『ラテン文典』

LIBER III

第3巻

137v DE SYLLABARVM DIMENSIONE.	音節の「量」について
145 DE INCREMENTO NOMINVM.	名詞における増大について
148 DE VERBORUM INCREMENTO.	動詞における増大について
150 DE VLTIMIS SYLLABIS.	最終音節について
155v DE SYLLABA COMMVNI.	音節全般について
157v DE PEDIBVS.	「脚（詩の韻律単位）」について
158v DE VARIIS GENER. CARMINVM.	詩歌のいろいろな種類について
160 DE CARMINVM DIMENSIONE.	詩歌の（韻律的）「量」について
162v DE CÆSVRA.	（韻律的）「休止」について
164 DE PATRONYMICIS.	「姓」について
168 DE FIGVRIS POET.	韻文における比喻について
169v DE PROSODIA.	韻律について
170 DE GRÆCIS VERBIS.	ギリシア語からの語句について
170v DE VOCIBVS HEBRACIS.	ヘブライ語からの語句について

『日本大文典』

第2巻

LIVRO II

173	Dos accentos da lingoa Iapoa.	日本語のアクセントについて
176	Regras acerca do vso do Sumi nigori.	Sumi nigori (清濁) の用法に関する規則
178	Dos modos de pronunciar a lingoa Iapoa.	日本語の発音法
179	Do modo de introduzir alguns vocabulos nossos na lingoa Iapoa.	われわれの或語を日本語の中に取り入れる方法について
180	Da Poesia de Iapam.	日本の和歌について

LIVRO III

第3巻

184	Do estilo da escritura.	文書の文体について
188	Alguns preceitos pera o vso do Coye, & lingoa da escritura.	‘こゑ’の用法に関する規則と文書の用語の規則若干
189	Tratado do estilo das cartas.	書状の文体の論
202	Do Xeixi de Iapam. i. juramêto por escrito.	日本の Xeixi (誓紙)、即ち書き物による誓約について
204	Do voto por escrito.	書き物による願書について
204	De como se escreue apetiçam, ou accusaçam.	訴訟を如何に書くかといふ事について
205	Do Mocurocu.	Mocurocu (目録) について
206	Dos nomes gentilicos de Iapam.	日本の名字について
212	Tratado de varios modos de cõtar.	いろいろな数へ方の論
229	Tratado do modo de contar os tempos, annos, meses, dias, horas, eras, &c.	時、年、月、日、時刻、年号などの数へ方の論
231	Dos animais que respondem as horas de Iapam, & dos rumos da agulha.	日本の時刻に該当する動物について、又羅針の方位について

参考文献

1. Manoel Alvarez (マヌエル・アルバレス)、DE INSTITUTIONE GRAMMATICA (『拉丁文典』)、天理図書館善本叢書 第五次刊行 語学篇Ⅱ
2. 家入敏光「アルバレス 拉丁文典」、『天理図書館善本叢書 第五次刊行 語学篇Ⅱ 解説』
3. 島 正三『ロドリゲス日本大文典』1969、文化書房博文社
4. J. ロドリゲス、土井忠生訳注『日本大文典』1955、三省堂
5. 土井忠生「長崎版『日本大文典』と天草版『ラテン文典』」、『吉利支丹論攷』1982、三省堂
6. 国原吉之助『中世ラテン語入門』1975、南江堂
7. 馬場良二「『日本文典』その成立の歴史のおよび言語的背景とロドリゲスの日本語力」『筑紫語学研究』第2号、1991、筑紫国語学談話会
8. 馬場良二「ロドリゲスの『日本文典』における「エレガント」について」『熊本女子大学学術紀要』1992、Vol. 44/1993、Vol. 45